1852

148
285

002692－000－9

特52－392

平壤大激戦実見録

鈴木　経勲／述

M27

ACB－6129

148
285

第三師團長陸軍中將桂太郎君

◎平壤大激戰實見錄

編者曰く、本篇は曩に名古屋なる扶桑新聞社より戰地特派員として渡韓されたる同新聞記者鈴木經勳氏が日清両國に於ける關ヶ原の合戰とも云ふべき平壤大激戰の實況を視察して歸朝せられたる後、同市の某劇場に於て非政談演説會を開き其實況を報告されし際、余が筆記したる要領なり看官諸彦其心して讀み玉へ　編者識

扶桑新聞特派記者　鈴木經勳君演説

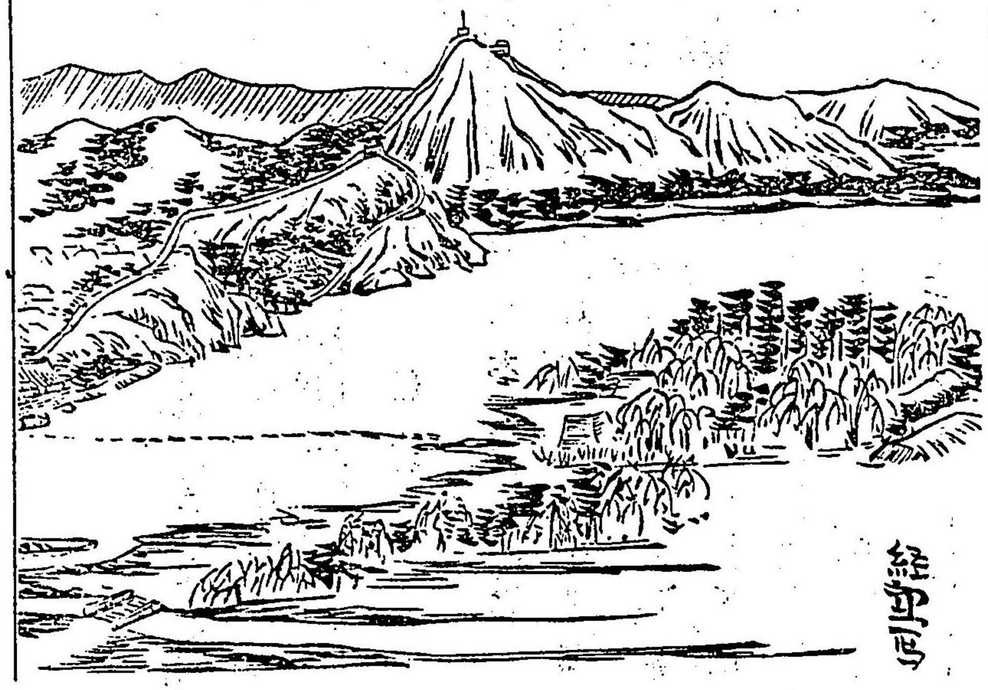
○小生は扶桑新聞社の特派員として朝鮮へ渡航し征清の軍に從ひ其實況を我が扶桑新聞愛讀諸君に御報告致す職務を帶びて居ります。何しても戰況抔を申すのは決して文章丈を以て完全なる御報告は出來ませんに依て歸朝したる上は演説を以て更に詳細御報告致す積りで居ました處で今般此演臺に於て報告演説を致す事が出來た上に諸君が又斯く盛んに御來場アッテ御清聽下さるといふ事は畢竟小生の職務を完然ならしむる義にて實に非常の喜悦で有ります之れとても實に君恩の優渥に且

の鴻大なるを以て斯く愉快なる報告を爲して諸君と共に大元帥陛下皇后陛下大日本帝國の萬歳を祝する事で實に何共此悦びを形容するに辞が有ません實に御同慶の次第であり升

扨て茲に御報告致す平壤の勝報は實に日清間の關係に就て非常なる重大の事情を有したる戰鬪で有ります此戰爭が今般大日本帝國の光輝を全世界各國に耀かし世界の各國は愈よ皇國をして宇内の强國なり而して其强國の位置は二等と下だす事を得ざる强國と認定したのです、世界各國が日本を以て宇内に一等の地位を占めたる强國と認定せねばならぬと論究せしは即ち此平壤の一戰が夫れ丈の光榮を日本に與へたのであり升

甫め清兵は牙山に據りて成歡驛に前營を置て一旦開戰と成つた時分には東は烏嶺の嶮を守り西は九峴山の嶮を占領して日本の釜山と仁川との両道を絶ち糧食彈藥の運路を斷絶し北は平壤に盛んなる兵を屯して我が北進を禦ぎ京城に日兵を攻撃して畢竟皇國の軍を京城と平壤の間に孤立せしめ三年間も苦

此畫は船橋里より平壤正面を撮影したる景なり



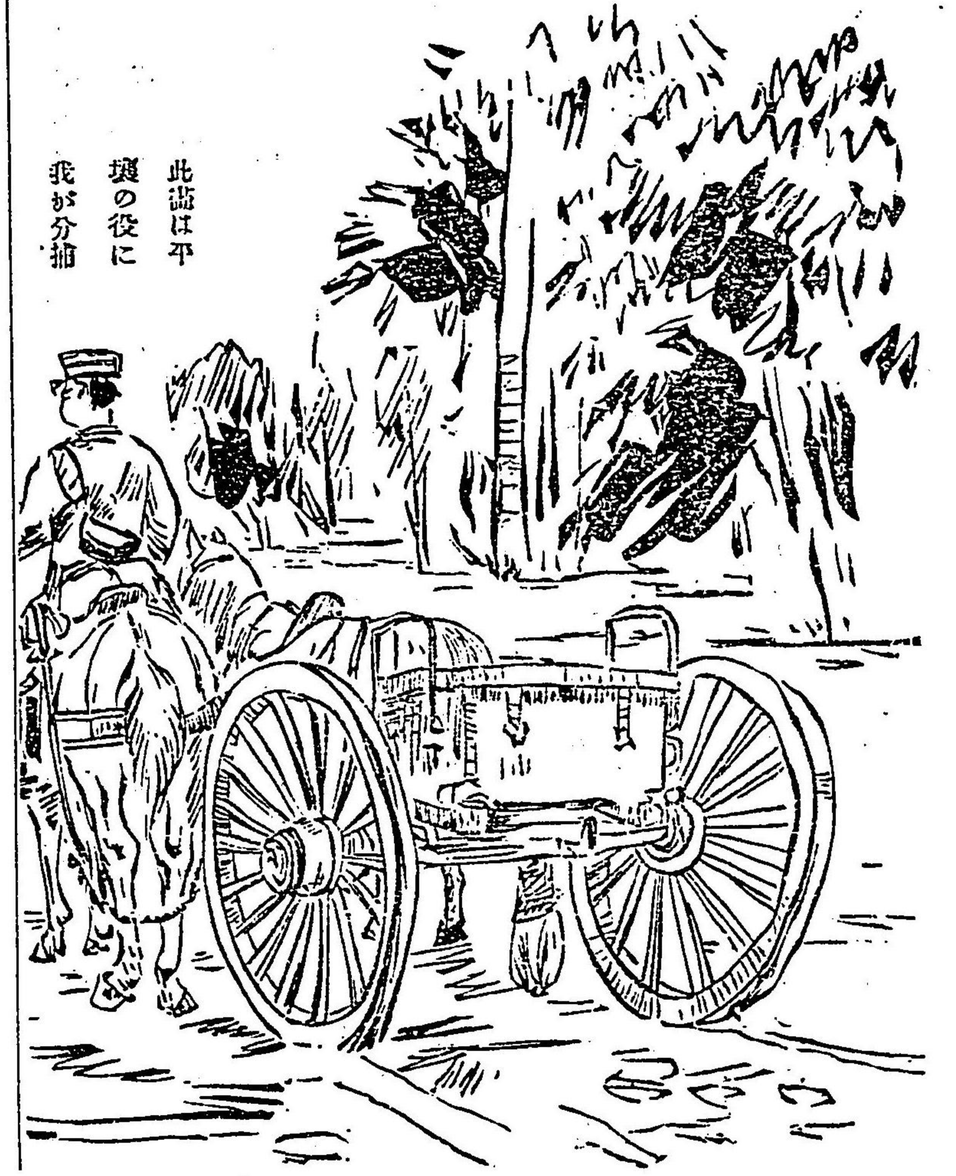
しめれば三年を待たゞして皇國の軍は自滅するか清に降伏するか其二より外に出る道のなからしめんとするの方畧を取りたのだそうです左も有る

此畫は玄武門内に於て敵軍が降旗を中央に飜へーたるを以て我が軍談判をなさん爲め玄武門へ押寄する處なり

べし牙山の兵と云ひ平壤の軍と云ひ其重なるものは李鴻章の部下の盛字軍と奉天府の奉字軍と奉天馬隊其外に毅字軍だとか其他種々の雜兵も有りましたが夫等は支那人自らも其弱兵なる事を信じて居た只彼が頼みとして居たのみならず大丈夫前言の目的を達するを得ることは盛字奉字両軍と奉天馬隊が在るから支那軍の全勝は疑ひなゝと彼は安心して

此畫は九月十五日混成旅團兵か船橋里の敵壘に肉迫ー激戰奮鬥遂に之を奪取る所なり

居た樣子でした尤も盛字軍奉字軍は支那四百餘州凡そ四億萬の内に力量才能共に衆に卓越したるものゝみを撰出して之を以て組織したるもの故支那全國中に此兩軍の右に出る兵はない支那第一等の强兵で



此輜は平壤の役に我が分捕

在ります又奉天馬隊は彼の滿州騎兵で此兵の爲めには古來英佛露國なども屢々苦しめられた世界に名高き驍勇なる騎兵で有升而して彼等の用ひ居る武器は如何かと云ふに第一大砲は皇國の兵が用ひしは山砲隊土器店高地を占領し船橋里なる清軍堡壘を砲擊する處なり

砲なれども彼はクルップ式の野砲を重に用ひて居ました何故に日本の軍隊は山砲を用ひしかと云ふに朝鮮の内地は道路多くは峻嶮にして野砲は其の運搬に非常なる不便あるより據なく山砲を用ひたのです山砲なれば馬の背で運搬が出來る野砲は左樣は行きません其代りには山砲より野砲の方が殆んど山砲の一倍も進撤力が有ります清兵は座して

此畫は九月十五日我が朔寧枝隊なる第二十一聯隊第二大隊が牡丹臺の嶮を乘取り大いに清軍を破ぶる所なり

守るゆへ大砲を運搬すると云ふ手數がないから皆野砲を用ひたゆへ砲擊の時は彼が放つ大砲の方が我が山砲よりは殆んと一倍の距離に達した又「カットリング」と云ふ速射砲

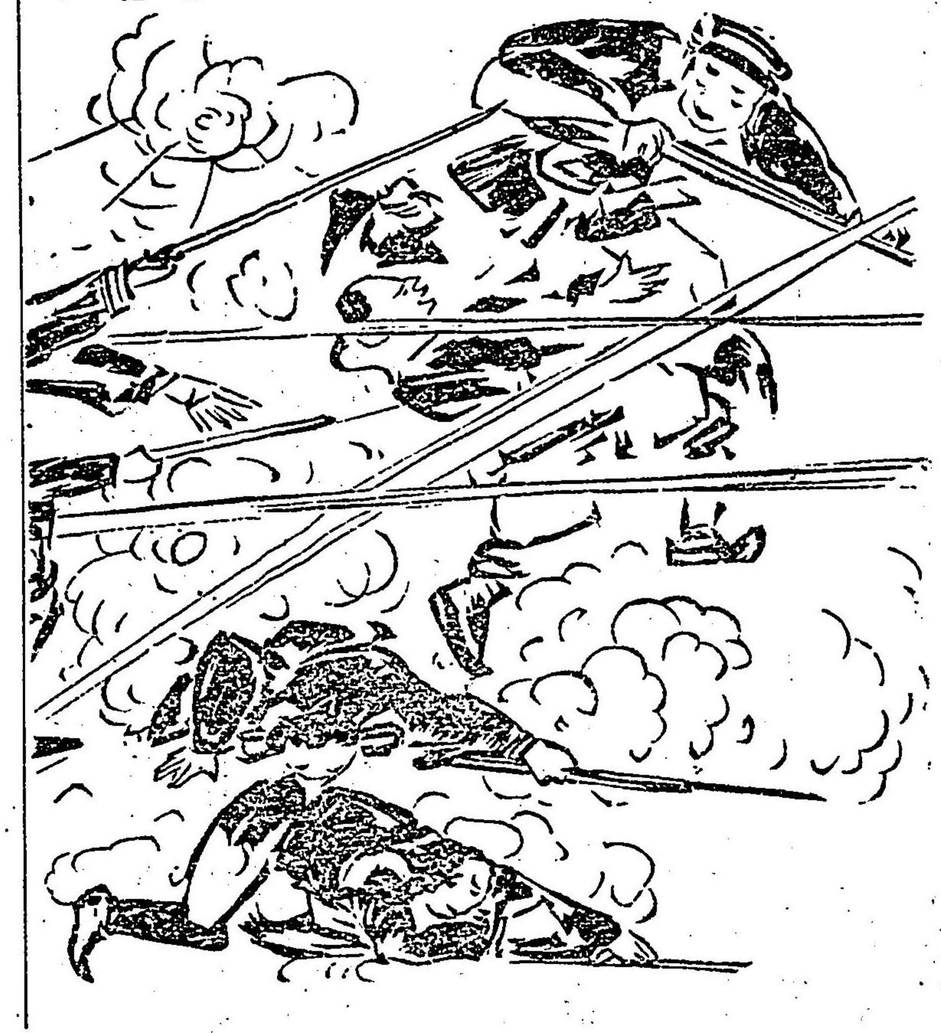
此畫は乙密門にて平壤の西北に在り元山枝隊が清軍を擊破する所を余（經勳氏）が目擊して撮影せーものなり

を臺塲の要處々々に備へて有りました此砲は一分間に六十發は打てる機關砲です砲は六挺づゝ二た側に造り付て有つて其後ろに車が付て居つて其車が一回轉に十二發づゝ發する樣に出來て居る其車は一分間に急いで回轉すれば十二回轉は出來る然る時には百四十八發を射つことの出來る砲で有ります又小銃は佛國新發明のグラー銃に非ざれば獨逸のモーゼル式の七連發銃で有りました然れば大砲小銃共に我軍の用ゆるものに比れば彼は鋭利なる武器を仕用したのでありす

又彼が據つて守り居る地形を申せば初めの盛歡牙山と云ひ又平壤と云ひ何れも守るに易し攻むるに難しと云ふ防禦に屈强なる所に計り據りました盛歡驛は山連の中に在りて森林が其周圍を蔽ひ我より攻むる方は水澤と田畝流水にて攻擊に極めて不便の地で有りました又平壤は東南に幅一千メートル以上の大同江を廻らし江を渡れば悉く斷岸絶壁にして擧ぢ登る事は決して出來ない處ばかりでした只城門に入る處だけは其斷岸の峻岩を切りて石垣を作りありて其垣の極端が即ち城門で有りまして其城門は大石を以て强壁を作り其上は悉く堅固なる城郭にして城内に入るには數個の城門の外其他に入るべき處は有りません其北と

西の方は大同江の如き大河流を以て隔絶してはない代りに急峻なる連山を繞らし其山上は盡く堡壘にして畢竟天然の城上に人造の城を造りたるもので其險固なる兎ても攻擊の望みある所ではない古小西

此戦は九月十五日拂曉混成旅團が三隊に別れて船橋里の葉志超馬健忠等が



行長の如き猛勇ですら茲で敗軍したといふ歴史のある處であります去れば清兵は其守る地は天然の要害に人工の要害を加へたる處を守り其兵は支那全國中精撰に精撰を盡したる一等の強兵を置き其武器は

死力を以て防禦せり

砲臺を乘取るの狀なり

世界に鋭利の聞へある新發明の武器のみを備へ殊に平壤は其近縣近郷の人民官吏まで皆悉く支那を奉戴して其情況は全く支那の第二の本國と云ふ可き地で有りました軍を作すに斯くまで便利な處斯くまで要害の地に據りて守ると云ふ事は實に他國に古來より其例は恐らく有りません事です加之清兵は行軍して此平壤に着し數十日間休養して全く疲勞を忘れ充分の健康を保ち居れり又清兵の糧食の如きは嘗て遠世凱と閔泳駿と相謀り盡く近縣近郷の役人を己れの隷屬即ち手下に任じ夫等をして六畜米穀等を清兵に献せしめ之を以て養兵の材料に充てたれば糧食は殆んど十分の用意ありて清兵自ら粱肉を餘すの傾きあるに至りました

之に反して日本の兵士は甫め出兵の令出るや豫備後備の人々は皆忠君愛國の四字を實際に身に行ふの時こそ到着せりとて爭ふて鋤鍬を抛ち競ふて軍門に赴かんと直ちに兵裝を整へ戰地に出發せしも此等の人々は一時軍事を中絶せし人多く只國家を愛し身を君上に奉じて天恩に報ゐんとするの熱心顔色に現はれ千辛萬苦を物の數ともせず振ふて船に搭じ炎熱殆んと九十度を越ゆるの候宇内に荒濤猛浪の聞へ高き朝鮮海を五百里或は三百里と航し夫より朝鮮内地の峻嶮名狀すべからざる惡道を旅行したるのみならず運送に極く不便なるを以て糧食は只生命を繋ぐに止り原野に露宿し瘴烟毒霧を犯して數百十里の旅行を爲して戰地に着せしものゆゑ之れ決して其身に疲勞なしとは申されません

敵は嶮嶇に據て鋭利なる武器を備へ充分に休養しある兵士之を守り我は疲勞極れる兵士をさしまねいて之に當る決して苦戰でないとは謂はれない

滯韓中の局外中立者は或は二ケ月間にして日兵は初めて平壤を拔くべし夫れも其兵が更に新ら手の兵と交替したる後に非ざれば或は平壤を陷入れる事能はざるべし又或人は三ケ月の日子を消費するに非ざれば六つかしからんと云へり局外者が日兵の忠烈宇内に卓越し居るを目擊しつゝも此評定を下したるは實に故なきでありません然るを僅か十八時間の戰にて之を能く攻め落すことを得たと云ふは實に將校以下諸士の忠烈と愛國の氣象が能く之を爲したとは申すものゝ

大元帥陛下の御威德の隆盛なる天地神明を感せしめ天人合應じて終に此全勝を得たるものと申すより外に申樣は有りますまいと思ひます（拍手大喝采）

（中略）

扨て平壤攻撃の當日は九月十五日でありました

此日午前三時より進撃を始め混成旅團は兵を右翼、中央、左翼の三手に分ち第一に船橋里の營を襲ひましたすると敵は我に應戰して銳利なる銃砲を乱射して頗る防禦に勉めたるも我兵の忠勇なる能く之を攻撃し激戰十八時間に渉り終に船橋里に在る敵の堡壘十六を奪ひ取り進んで平壤に入りました

時に朔寧支隊は平壤の東部牡丹臺に迫り十八聯

此畫は九月十五日師團本隊が東南より平壤に攻め寄せ大奮して朱雀門に迫り大いに清軍を殲滅するの狀を撮影せーものなり

隊の元山支隊を合し平壌の北部より攻撃し師團本隊は平壌の西部より攻撃し終に八方に手を分ちて平壌を袋攻めに攻め立てました元來愛國の心なると上下共に相欺きて只自己の安全と利慾の目的を以て軍に從ふたる清兵なれば其休養の行屆たるも其武器の鋭利なるも其力量

此圖は九月十六日平壌攻落の後我が兵士が清兵の捕虜を引致して我

が士官之れより審問せんとする狀なり余（經團氏）撮影す

の强剛なるも之を用ゆるの途なく兎角する內に馬玉崑、左寶貴等の重立ちたる將師は戰沒したれば敵軍は恰も蛛の子の散るが如く混亂して散々に乱れ思ひ〳〵に只逃三味と成り終に平壌は全く我が軍の手に入りたる次第で御座り升（拍手大喝采滿場壞る〳〵如し）

局外者は始めに二ケ月或は三ケ月も清兵と相對待するならん中には三年間は平壤に日清の交戰續く可しなどゝ云ひしが僅々十八時間にして日兵は之を乘取りたれば其驚き大方ならず終に各國の人をして日本は今は文明的眞の强國なり而して其强國の位地は世界に第二等と下す事を得ずと畢竟世界に一等の强國なりと頌揚せられ且つ我帝國の光輝を宇内萬國に耀かすに至りました

此戰に於て最とも人目を驚かし肝膽をして寒からしめしたる事は朔寧支隊に屬する豐橋歩兵第十八聯隊の二等卒原田重吉氏が玄武門の側なる城廓を乘り越へ敵中に飛入り夫より玄武門の内面に於て敵と鬪戰しつゝ終に門際の障害物を悉く取り除け門を開放ちて立見少將閣下を導きたる事なゞは殆んど人間の所爲とは思はれぬせん（拍手大喝采）

又混成旅團の中央隊が船橋里の正面より敵壘に肉迫して將校一人も殘らず皆奮鬪忠死したる爲め兵卒は指揮官を失ひたれども其位地を保ちて一歩も退かず敵は其兵の指揮官なきを見て非常に激鬪を成し我兵を苦しめし時長岡參謀少佐は騎馬に跨り大刀を揮ふて兵を進め前へ〜との一聲の號令を發するや三十六人の兵卒は躍んでゝ敵壘を乘取りしが終に一人の

踵を廻らすものなく三十六人頭を並べて其塲に忠死せしが敵は日兵が悉く戰死せしを氣付かず如何なる突貫に逢ふやも知れずと思ひ終に壘を捨て遁れ去りしが實に日本の兵の忠勇なる身死しても能く其精神は目的通り清兵を退ひ退けたるは之れ則ち日本魂の日本魂たる所以で御座いませう（拍手大喝采）

平壤の城内乱れまするや清兵數十人は大同江の下流に遁れんと致しまして水濱に赴き豫て用意の船八艘に乘り込み遁逃せんとせしに其船は前夜我兵が江を泳ぐで之を奪ひ取りたれば支那兵は大に驚き據なく古木を集めて桴を拵へ之に一杯乘りて江流に從て下る處を羊角島に居合せたる我兵二小隊が之れを認め甚だしく擊射したれば乘居たる支那兵は一人を餘さずブツ〳〵往生を遂げ果てしめたるは實に心地よかりし（ヒヤ〳〵大ヒヤの聲起る）

長尾曹長は乘馬を敵彈に斃されたれば之を乘り捨て營に歸へりしに件の馬は起上り血に染みて足も千鳥足にてひよろ〳〵と長尾曹長の跡を慕ふて歸來て曹長の背に縋りて終に落命せしが鬼神も啻ならざる如く怒り猛りたる兵士も一齊に涙を落しました

平壤を乘取りたる朝牡丹臺へ數萬の兵士は皆集りて　大元帥陛下の萬歳を祝し　奉り　皇

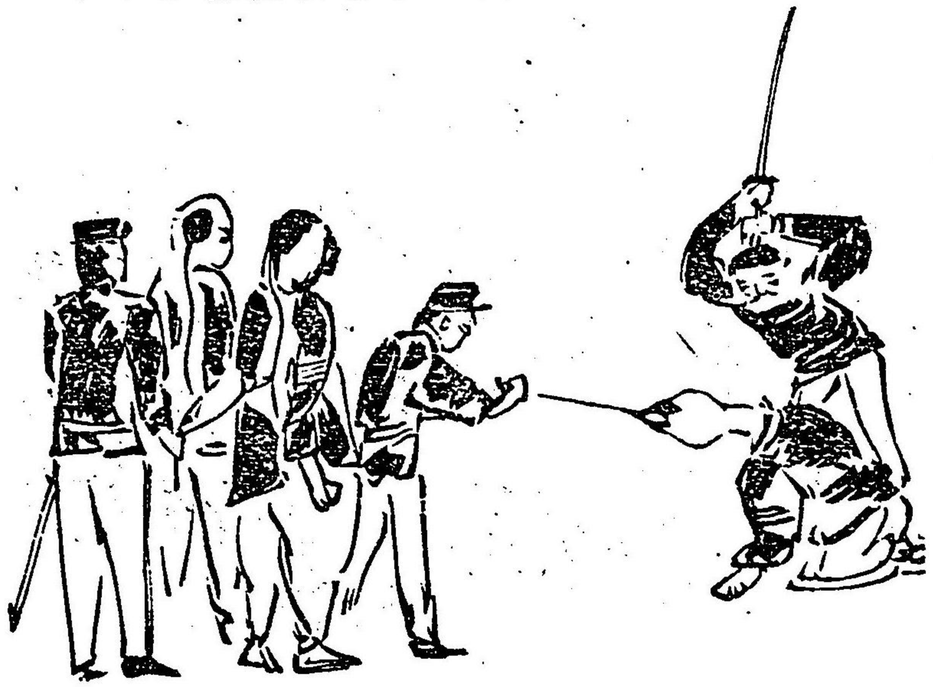
后陛下の萬歳を祝し奉り大日本帝國の萬歳を祝したるが其聲天地に赫きしは實に勇ましく又艶くして滿城の人をして手の舞ひ足の踏を知らざらしめまし

赤十字社の社員が懇切に敵と味

此畫は平壤に於ける清兵捕虜の未決者なり

方の差別なく負傷者を恰かも慈母の子を顧るが如く施療介抱せる樣は局外中立者即ち萬國の人々をして大日本帝國の軍は實に文明の義軍なり大日本帝國は實に文明的强國なり大日本帝國が斯くまで文明に進みたるを知らざりしは實に各國の恥辱とする所なり今より大日本帝國は世界の尊敬崇拜を受くる益々盛大ならんと異口同音に頌揚の聲を發せしめしは大元帥陛下の御威德によりて我兵の忠勇愛國に獨歩するに依るは勿論なれども又赤十字社の力與りて大に功を奏せりと云ふも敢て過賞では御座いませんかと考へ升

此畫は清兵の捕虜にして我軍に降伏せざるものと逃走を企てたるものを斬罪に處する處なり其審問官は福島中佐なり



此戰に於て奮鬪忠死せられたるは將校八名と下士卒一百五十四名でした嗚呼此諸君の奮鬪忠死は實に帝國の光輝を世界萬國に發耀せる今日に當り其功勳實に大なりと賛美致します然と雖ども我國家は斯る忠勇なる將校兵士が清兵の爲めに終に鬼籍に入り玉ゐしは豈亦退吊哀悼の情に堪へん次第であり升

今は平壤攻撃が國家の目的とする所の大事を貫徹して東洋の君國と世界に賞賛せらるゝを祝すると同時に忠勇無双なる將校兵士が其百六十餘名の數を減せしは轉た哀悼の情に堪へません

此畫は我兵清兵の即決捕虜を使役し戰死者の遺骸を火葬する所なり

此畫は平壤の激戰に名譽の戰死を遂げたる將校以下百四十名の紀念碑にして碑文は大島混成旅團長が手記せりと

なれども此の忠勇絶倫なる將校兵士の神靈は上　大元帥陛下の叡慮を貫徹し奉り下國民を東洋の最上位に置き駸々乎として益す清兵を敗り國家を泰山の安に置くを得るを見て必ず大に慰する所あるは信じて疑はざる所であり升茲に

大元帥陛下萬々歲

皇后陛下萬々歲

大日本帝國萬々歲

を唱へまして今夕の演說は終りと致升（鈴木經勳若、萬歲、々々々々々、々々）

◎平壤大激戰實見錄（終）

◎平壤大激戰實見錄附錄

○平壤に於ける豐橋十八聯隊戰死將校以下下士卒の氏名

第三師團豐橋歩兵第十八聯隊の將校以下下士卒にして平壤大激戰の際、名譽の戰死を遂げたる諸勇士の氏名を左に掲載す

歩兵大尉正七位勳七等　金藤之明
歩兵中尉從七位　神田音熊

第三大隊附　一等軍曹　村田良平（靜岡縣城東郡河城村富田八十四番地）
第九中隊附　一等軍曹　吉村政次郎（福井縣遠敷郡國寅村熊野）
同　隊豫備　上等兵　望月藤次郎（靜岡縣富士郡田子浦村）
同　隊　一等卒　松本丑吉（同縣庵原郡飯田村下野）
同　隊　一等卒　岩田常吉（同縣田方郡韮山村）
同　隊豫備　一等卒　岩田常吉（同縣富士郡大宮町源通寺）
同　野田淺次郎（同縣豐田郡袖浦村）
同　鈴木喜作（愛知縣八名郡三上村）
同　山本由藏（靜岡縣有渡郡長田村下川原百一番戶）
第十中隊　上等兵　鷲津米藏（愛知縣渥美郡六連村廿一番地）
同　鈴木茂吉（靜岡縣駿東郡小泉村茶畑廿六番地）
同　一等卒　庄司文次郎（同縣君澤郡西浦村廿三番地）
同　相磯松吉（同縣佐野郡東山口村伊達方七十六番地）
同　二等卒　松井藤太郎（同縣駿東郡沼津町本町十二番地）
同　大野貞吉（同縣富士郡元吉原村田中新田廿二番地）
第十二中隊　上等兵　梅原房吉（同縣駿東郡沼津町宮町三十七番地）
同　一等卒　金子德次郎

第十一中隊　愛知縣西加茂郡擧母町七百五十三番戸　一等卒　黒川桝吉
第二中隊　靜岡縣數知郡新居村三百九十四番地　同　村田美代吉
同縣同郡富塚村大字和合五十番地　二等卒　池谷佐七
同　愛知縣額田郡福岡村大字上地五十三番戸　同　畔柳松次郎
第三中隊　靜岡縣數知郡村櫛村四十二番地内一番　一等卒　小松文吉
同　京都市下京區綾小路油小路芦川山所　曹長　金原伊懌
第四中隊　靜岡縣數知郡南庄内村脇和　一等卒　石塚多作
同　同縣長上郡芳川村都盛　同　高橋德三郎
同　愛知縣寶飯郡牛久保村大字中條　同　太田兼三郎
以上二十六氏は九月十五日平壤に於て戰死
第十中隊　愛知縣幡豆郡西野村廿八番戸　二等卒　山田金次郎
靜岡縣山名郡久努村四十五番地
第三中隊　同縣長上郡和田村藥師新田廿七番地　一等卒　石川藤吉
同　二等卒　加藤和三郎
第四中隊　三重縣一志郡久居町字西歷跡町　二等軍曹　桑名貫一
以上四氏は九月十七日負傷後、平壤病院にて死沒
第三中隊　靜岡縣豐田郡長野村小島廿六番地　二等卒　堀内治三郎
氏は九月廿日同上
第十一中隊　同縣同郡下野部村　一等卒　松島午吉
氏は九月廿二日同上
第九中隊　同縣富士郡增川村廿三番地　一等卒　井倉寅松
氏は九月十五日同上
合計三十三名

○豐橋歩兵第十八聯隊平壤攻擊の歌

朝鮮國の一揆より
清國政府は朝鮮を
我日の本を辱しめ
明治甲午の夏の頃
日清韓に事起り
屬國視する許りかは
傲慢日々に募るより
東洋平和を謀らんと
古き聖の道廢れ
餘所に明行く文明も
知らで益々皇國に
今は敎ゆる術もなし
義俠の爲に朝鮮の
受し恥辱を雪ぐため
豐橋衛戍の聯隊は
宇品港を船出して
元山津に上陸し
虎伏野邊の露に寐て
弓手の方に着にける
見上る許り聳えつゝ
皇國は穩かに
正義公法唱ふるも
世界の大勢眼に暗く
己が滅亡近きをも
仇を爲すこそ憐にて
然ば是より日の本は
獨立謀り得さすると
頃は八月末つ方
遠征軍の一として
潮の八重路を打渡り
馬足の險や馬頂山
日數も立ちて平壤の
敵の根城の平壤は
南北西は敞開し
東に大同流あり
殊に勝れて彌高く
防禦工事は堅固にて
然れど我軍々人は
國は昇平世は無事に
憂を晴すはこの時と
逸り起ちたる皇國軍
聯隊旗や大隊旗
靡かぬ者は非ざらん
總進擊の令下り
四方に打出す砲聲や
天地崩るゝ許にて
其の進擊の勇猛は
所々の砲臺乘越へて
磨る墨よりも黑雲の
廻れる一里の胸壁は
據たる敵は三萬餘
要害古今に比ひなし
十有餘年の其間
肥ゆる牌肉を嚼てし
彌猛心の一筋に
在々所々の陣頭は
敵は幾万ありとても
明れば九月十五日
隊伍整々堂々と
村田銃聲其の樣は
中にも十八聯隊の
怒る阿修羅に異らず
進む折柄蒼空は
棚引く間より鳴神や

篠を束ねて降る雨も　敵を射斃す稲妻も
名殘り情は嵐野と　皇國を援る心地して
彈丸雨飛も何の其の　調べ揃へて軍歌をば
一軍擧げて謠ひつゝ　城壁指して攻め登る
嗚呼勇敢ぞ勇敢ぞ　其時敵地を能見れば
敵は樹てたり降參旗　斯る堅城鐵壁を
頼みて據りし淸軍も　攻擊僅か十五時
風に木の葉と散々と　夜を幸ひ落ち延る
所謂窮鼠の葉武者共　此處を先途の血出路
五十　三十　又　百餘　群をなしては襲來る
侮り難き勢ひも　前哨部隊の沈着と
增加部隊の指揮善に　餘さず擊ちて斃し鳧
明る旭によく見れば　流るゝ血汐は川と也

支那街道は　堆き　屍の山を築きつゝ
殘は捕虜と兵器なり　嗚呼壯快よ壯快よ
然れど前途は悠遠ぞ　勝て兜の緒を締めて
軍紀號令能く守り　安州義州の敵兵を
足下に蹴立て鴨綠の　河畔に飲ひ進み行け
人生わづか五十年　月雪花に戯れて
褥の上に終る身は　醉生夢死の譏あり
屍を馬革に蹇まんは　是ぞ勇士の分なるぞ
是ぞ勇士の譽なり　去來や進まん戰友よ
山は裂行き原となり　海は干潟と成とても
聯隊旗を押し立てゝ　盟を城下に誓はして
昇る朝日と諸共に　綾に畏き皇國の
御稜威を世界に輝せ　御稜威を世界に輝せ

明治二十七年十一月二日印刷
明治二十七年十一月六日發行

正價貳錢五厘

編輯者　名古屋市東魚町十三番戸　佐野卯三郎

發行兼印刷者　名古屋市西魚町四番戸　岩間彦太郎

發行所　名古屋市西魚町四番戸　博文社

Y-40